

2. 本プロジェクトのねらいと 活動実績・成果

金井 昌信 (群馬大学大学院)

はじめに、このプロジェクトのねらいと3年間の活動実績・成果について、ご紹介させていただきます。

このプロジェクトは平成26年に、文部科学省の『リスクコミュニケーションのモデル形成事業』に、群馬大学が『姿勢の防災教育を通じた災害文化の形成』という研究課題で申請して採用されているものです。そもそものねらいは、「自然災害による犠牲者ゼロの地域社会の実現を目指し、小中学校における防災教育を推進し、それを継続する仕組みを構築することにより、地域の災害文化の形成及びその定着を図る」というものです。

そのために、皆さんに何度もお集まり頂いた『防災教育推進連絡協議会』の開催を通じて、『人材育成』と『実践継続のための仕組み作り』を行っていく。だから、連絡協議会に参加して集まって頂いた皆さんは、人材育成のターゲットであり、このグループの中でどんどんいい人を作っていこうというのがねらいです。そして、皆さんの地域が、皆さんの努力によって、防災教育を継続する仕組みを作っていくことを目指す、というのが、このプロジェクトのねらいというわけです。具体的には、防災教育推進連絡協議会では、「効果的な防災教育がどうあるべきか」、「地域、保護者を巻き込んだ継続的な実践はどうあるべきか」ということを参加者間で議論していくために立ち上げました。

皆さん、おわかりかと思うのですが、防災教育推進連絡協議会は、「防災教育をやりたいです」という人に来て頂いていたわけではないです。既に自らで実践していて、成果をあげていたり、壁にぶつかったりと、それなりの知見、経験を持った先生方にご参加いただいています。そういった先生方とレベルの高い所で議論したいということで、参加者をこちら側である程度厳選して毎回開催させていただきました。

これまで4回に連絡協議会は開催させていただきました。まず平成26年12月に岩手県釜石市において第



金井 昌信 (群馬大学大学院)

1回目を開催させていただきました。ここでは参加して頂いた全国8地域の皆さんから、今までどんなことやってきたという各地域の実践について発表して頂き、情報交換をさせて頂くとともに、継続的にこの会を実施していくにあたって、今後どんな議論をしていくべきかを意見交換させていただきました。具体的には、「これまでの防災教育の実施と効果って何だったのか」、「これから効果的な防災教育を実施していくうえで求められることって何なのか」、それから「継続的に実践していくためには、どんな仕組みが必要になってくるのか」というテーマについて、グループディスカッションを通じて、参加者の皆さんで議論しました。今までそれぞれの地域で何となく個別に頑張っていた皆さんが、一堂に会して問題意識を共有することができたということと、具体的に、「継続的に何を議論していけばいいか」という認識を共有することができたのが成果かなと思っています。それから、地域を超えて参加者同士で交流する機会のきっかけも作れたなと思っています。

2回目は、平成27年8月に、和歌山県田辺市において開催しております。ここでは1回目の議論を踏まえて、『防災教育に求められるコミュニケーション力』と『家庭・地域との連携した防砂教育』をテーマにパネルディスカッションとグループディスカッションを行い、意見交換をしました。その成果としては、生徒・児童の『災害に対する我がこと感』や『リアリティ』を高めるための『心を揺さぶる発問』、それから『実践的な防災教育における家庭・地域との連携の重要性とその具体的な手法』について、参加者で深い議論ができたと思っています。

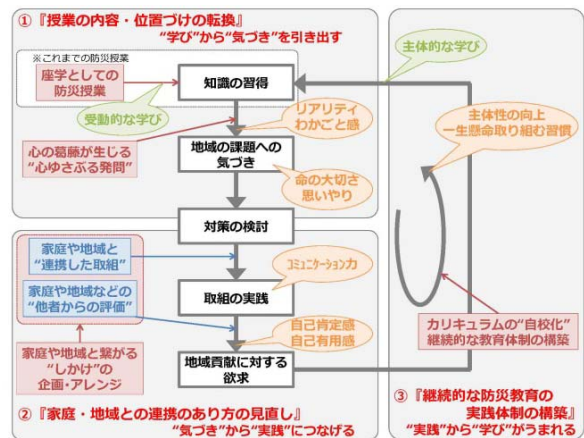
更にこの議論を踏まえて、平成27年12月に、高知県黒潮町において第3回を開催しました。前回の議論を踏まえて、開催地である黒潮町さんが、行政と学校が一体となって、地域をあげての防災教育を実施しているということで、それを事例にして、『地域と連携した防災教育』、それから前回に引き続き、『児童・生徒の心に響き行動を変える授業』について具体的に議論させて頂きました。その結果として、防災を題材とした実践的な学習は、いろんな効果ありそうだという可能性と、そういった効果を発現するために具体的なポイントについて、皆さんと問題意識を共有できたのかなと思っています。

ここで、これまでの成果として、具体的な実践のポイントを三点紹介させて頂きます。

一つ目は、座学で防災に関する知識を与える授業で得られた学びから、地域の課題であったり、家庭の課題であったり、自分たちの課題であったりと、自分以外の誰かに関連する問題ではなくて、「自分たちに直接関係のある問題なんだ」という気付きを与える、リアリティを高めてあげるとい授業が、最初に重要になるという点です。

次に、自分たちの問題だという気付きを与えたら、「地域のため、自分のため、家族のために今できることは何か」を考えさせ、それを具体的な実践につなげてあげるのが、二つ目のポイントです。このとき、ただ実践するだけじゃなくて、子どもたちにとって大切な家族であったり、地域であったり、地域のお年寄り、小さい子どもたちなど、そういう方々のための実践なので、そういう方々との連携を重視する。それから、自分たちでやったことを、そういう方々に伝える機会まで作ってあげる。実践を通じて、子どもたち自身が「誰かのためになったんだ」という自己有用感を感じられるような仕組みを作っていくことが大事なポイントでした。

そして、そこまでいけば、子どもたちは、自分たちで実践した結果からもっと地域を良くするために、「まだ自分たちに何かできることがあるんじゃないか」と主体的に学び出す、新たな学びが生まれてくる。このループを回していく、つまり実践的な防災教育を継続していくことによって、様々な教育効果



につながっていく可能性にある。このような主体的な学びの中で、主体性が向上したり、何事にも一生懸命取り組む姿勢が育まれてくるのではないかと、というのが三つ目のポイントでした。

さらに、この三つを継続的に実施していくことが、防災を核とした子どもを育む環境を作っていくことにつながる。学校での防災教育を継続することは、地域にしっかりと防災を学んだ大人を輩出し続けることにつながる。そうすると、学校だけじゃなくて、地域の大人たちが、子どもたちに防災を教えるようになり、子どもたちを育む環境が変わっていく。これが地域の文化につながっていく。長期的にそういうことを目指していきましょうと話もできました。

最後に、このようなポイントまでを踏まえて、昨日8月20日に、第4回防災教育推進連絡協議会を開催させて頂きました。これまでの議論を踏まえて、新たに出てきた実践の課題等を共有し、今後も継続的に集まって議論していく機会が必要だということを確認させて頂きました。

冒頭お話をさせて頂いた通り、このプロジェクト、目的は、人材育成と実践継続のための仕組み作りです。片田先生のご挨拶にもありましたが、本日のパネルディスカッションでご登壇頂く8名の中に群馬大学関係者は一人もいません。各地域で実践されている先生方が、このプロジェクトを通じて、防災教育に対してどのような思いを持って頂いたのか。それを見て頂ければ、このプロジェクトを通じて、どれだけ素晴らしい人材が育成できたのかを確認して頂けるかと思えます。以上です。